左に愛を、右手に銃を。

藤和葵

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
左に愛を、右手に銃を。

【Ｎコード】
Ｎ１２４８ＢＡ

【作者名】
藤和葵

【あらすじ】
「今時の恋は弓矢なんて温い速度では始まらない。」
あたし、藤由朗。名前の頭に「故」、年齢に「享年」が入るようになってからキューピッドになる事になりました。――そんな感じで主人公死亡から始まる愛と恋と時々バイオレンスを含む多分学園天使ラブロマンス。

愛の病にはより強い愛を。

３５．７口径から秒速４００メートルの速さで、強く重たく激しくはぜる目覚めの一発。

今時の恋愛は弓矢だとか生温い速度では始まらないのだ。

＊　＊　＊

アナタは天使を信じますか？

あたしは「いたらラッキー？」なくらいの、どっちかってぇと信じてない派でした。

幽霊くらいは何となくいるかな～って思ってはいても、よくイメージされる「人々に救いの手を差し出す純白の羽根を持った人」って、何か都合がよくね？　と、ひねて考えたり。

だけど、天使はいるのだ。

色々な意味であたしの想像を越えた存在として。

そいつはある麗らかな春に突然現れてこう言ったのだ。

「俺、千年（チトセ）。天使やってんだけど、相方転生しちゃったからアンタ代わりにやってみる気ねぇ？」

引かない？

普通なら何言ってんのこの人ってなるよね？

しかも天使と名乗ったこの男、ふわっふわした蓬髪頭を尻尾のように後頭部辺りで一つにまとめ、黒い着流の仁侠風。
更にヤル気のなさ気な垂れた目線を上から投げ掛ける様は完全なる悪人面。
頭に輪っかもなけりゃ、背中に羽根もない。どっからどう見ても‘ヤンキー兄ちゃん、お祭りで小粋に浴衣で決めたぜ’的な風貌のこの不審者。とどめで帯に鈍色に光る鉄の拳銃を差されたら身の毛総立ちだものよね。

だけど、この時にあたしはこの自称天使の千年さんを信じた。
別に『天使部　縁結び課　千年』と印字されたよれよれの名刺を渡されたからではないよ？
信じてしまう状況にあったんだ。

だってさ、当時のあたしは途方に暮れていた。

自身の４９日も終わり、落ち着きを取り戻した家族を見届け、さてこれからどうしようか、天国って何処だろうなんて先行きに迷っている時だったから、つい差し出された武骨な手を取ってしまったというか……。

――あ、申し遅れました。あたし、藤吉朗（フジヨシホガラ）というごく平凡な高校進学間近の女子中学生――でした。三月の麗らかな春、名前の頭に「故」と、年齢に「享年十五」が入るようになるまでは。

早い話、不運な事にあたしは若い身空で天使に近い存在になってしまったという訳。しかもその近しい存在が天使へとスカウトされるとかそりゃ何のギャグだと、悲しみに浸る間もなく笑い飛ばすくらいに第二の人生ならぬ、新たな死後生活が幕を開けたのです。

――そして、現在。

「ほれ、ヒデヨシ。しっかりと照準を合わせろ。頭か胸付近ならどこだっていいんだからよ」

そう言って、千年さんは背後からあたしの頭に右手を乗せる。
ガッシリした手があたしの頭をボールのように掴み、そのまま目標にしっかり視点が合うように支えてくれた。この乱暴なやり方がこの人なりの優しさなんだと約一ヶ月間の研修中には知ったんだけど、痛いものは痛い。

「千年さん、練習通りしますから離して下さい。そんでヒデヨシって呼ぶな」

「いーだろ、別に。コードネームだと思やなんかイケてんじゃねーか」

「コードネームならもっとカッコいいのがいい」

「ばっか、お前。天下取りの何処が不満なんだ。戦国のサクセスストーリーだぞ」

「千年さん煩いです」

前言撤回。あたしは重く溜息を吐く。
どうやらあたしの名前、藤吉朗がトウキチロウと読める事から、かの太閤さんの古い名前、木下藤吉郎から転じて豊臣秀吉に何をあやかりヒデヨシとあだ名つけたらしいのだが、男名で呼ばれて喜ぶ女子がいるのか問いたい。

大体どことなく人を馬鹿にした言動と馴れ馴れしさも思春期の女の子には不快極まりないんだよね。いや、これが超イケメンとかならときめくトコなんだろうけど、千年さんの万年眠たげな重たそうな瞼に、欠伸をだだ流しで締まりのない緩んだ口元はもうなんか存在事態がたまに嫌になる。

と、不満はあるが上司のビジュアルにケチ付けても仕方がない。あたしは頭を固定する手を振り払うのをやめ、両手に抱える重量のある黒い物体を握り直した。

リボルバー式って言うんだっけ。六発弾が込められる、西部劇とかロシアンルーレットで目にするタイプのやつ。

テレビや映画で見掛けるような黒光りする拳銃。千年さん曰わく、かの有名な宇宙海賊と同じコルトパイソンとか言う型なのらしいが、銃なんて興味がないので「だから何？」である。

でも、それを誰かに向けるとなると銃に対する意識は大きく変わる。

実はあたし、生まれて（死んで？）初めて銃口を人間に向けるという体験をしていた。

ターゲットは目の前にいる、ちょっと気難しそうな雰囲気の眼鏡の男子高校生。

彼は図書室のカウンターの内側で腰掛け、本を読みながら貸出の受付をしている。

図書委員かな。なんて思いながらカウンターから覗く頭に狙いを定める。

いわゆる‘霊体’のあたしや千年さんは普通の人達には姿を悟られない。ごく一部の、一般的に‘霊感がある’類の人には感知される事もあるようだが、まるで生身の人間として捉える人は現代では

稀だという。（そんな話を約一ヶ月間の研修の座学で千年さんから習った）

要するに、常人には見えないあたしがターゲットの眼鏡君の目の前に立ち、カウンター越しに額に銃を突きつけようと騒ぎにはならないって事だ。だから簡単に弾を外す事はない。狙いはオッケー。練習でも上手くいった。眼鏡君が突然動かなければこの弾は当たる。

当たる筈……だけど、

「やっぱ怖いっ」

引鉄を引く瞬間あたしは思わず銃口を思い切り真上に逸らした。猛烈な爆音と火を吹いて飛び出た弾丸は天井にのめり込んだ。パラパラと土埃みたいなのが頭上から降るのを眼鏡君が訝しげに眉を潜めたが、天使特製の弾丸は不可視なので首を傾げてまた視線を本に戻す。

「良かった……」

「良かねーよドアホ！」

ホッとした瞬間、千年さんの野太い怒号と同時に後頭部に痛みが走る。

「いったぁっ！　千年さん！　下駄で蹴るのは反則だよ。ほら涙出た」

目から星も出た。あまりの痛みに半泣きで訴えたら更に手で頭をはたかれた。

「泣きたいのは俺だよ。無駄弾一発ごとに給与明細から引かれんだぞコラ」

そう言って千年さんはあたしの手から拳銃を奪い、

「こーゆーのはなぁ、躊躇わずにすぐ撃ちゃいーんだ」

右手を流れるように的に向けると、迷わず発射。

ダァンッと破裂する音を耳にしたのとほぼ同時に、弾丸は眼鏡君の頭を貫いた。

あたしは反射的に目を瞑るが、人が倒れる物音はいくら待っても来ない。

「起きろヒデヨシ」

また頭をはたかれて目を開ければ、眼鏡君は普通に元気。

眉間に穴を開けて血を流すグロテスクな状態にはなっていなくて、それどころか頬を赤く染めてむしろ血色がいいみたいな？

そんな彼の視線の先には、本棚の上の方へ手を伸ばすこの学校の制服を着た女の子。

セミロングの真っ直ぐで黒い髪が、ちょっと固くて癖毛のあたしには羨ましいくらい綺麗で、華奢で線の細い体に映えてもいる。

可愛い子。女のあたしから見ても可愛い、ちょっと儚げなその子に、あの眼鏡君は恋に落ちたんだと一目見て分かった。

さっきまで無愛想に見えた眼鏡君には、新しい感情が芽生えたんだ。

「よく見ろ、ヒデヨシ。これが俺らの仕事だ」

また頭に手を置いて、その上に顎まで乗せて千年さんはあたしに言った。

「研修中も言ったが、怖がるな。このピストルは生者の使うモンとは違う。天使のモノだ。キューピッドの弓矢だと思えばいい」

その話は何度も聞きました。とは言えなかった。聞いててもやっぱりいざとなると怖じ気付いたのは確かだから。

「余計なお節介かも知れんがよ、どうしてなかなか、人が人に恋に落ちる瞬間は美しいじゃねーの」

ニカッと笑い、同意を求める千年さんの言葉にあたしは小さく頷いて、彼女に歩み寄る眼鏡君の背中を眺めた。

うん。悔しいけれど反論の言葉が見当たらない。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1248ba/

左に愛を、右手に銃を。

2012年1月3日01時52分発行